



国際化の最前線から



自治体間の友好提携事業からの展開

ロイヤルシルク財団

インドネシア共和国ジョグジャカルタ王室は1994年地域固有の野生の蛾の繭からのシルク開発事業を開始、野生の蛾が育つ森の育成等社会福祉活動を継続している。

両都市友好提携からの展開

京都府とジョグジャカルタ特別州は1985年に友好提携を締結し交流が始まった。しかし伝統工芸に関しては、「着物」や「バティック：ジャワ更紗」を相互で紹介するに留まっていた。また、日本では世界無形文化遺産である「バティック」が百貨店での“アジア雑貨”催事または美術館での展示として紹介される程度の状況であった。

2005年友好提携20周年記念事業としてロイヤルシルク財団と本藍染雅織工房を中心とした伝統工芸技術の連携活動を実施。モットーは「両地区の伝統技術を尊重し更なる高みへ、似て非なるものづくりはしない」。京丹後の「着尺地」をジョグジャカルタへ、ジョグジャカルタで「バティック」を施し、藍染以外の部分を鑑付けし京都へ、京都で「本藍染」を施し「着物」に仕立てる。伝統技術の連携により生まれた「バティック着物」はバティック単独の価値から10倍を超える付加価値を生む商品に至り、百貨店の特選呉服売場で販売される両地区連携の高品位商品に育った。



「きもの藍染バティック」織・バティック・藍染・仕立て、伝統職人の連携作品。

左：ロイヤルシルク財団主宰者 GKR マンクブミ女王

物流から交流へ

2006年ジョグジャカルタはジャワ島中部地震による被災を受け、バティック等手工芸工房が大きな打撃を受け

ロイヤルシルク財団 特別アドバイザー 黒田 正人

た。京都府は自治体国際化協会の協力を得て、被災地の手工芸復興支援を実施、お香の老舗・松栄堂や西陣織の各企業が参加し両地区の事業連携が推進された。2008年ジャカルタ国際手工芸展において日本インドネシア友好50周年両都市コラボレーション作品を紹介しユドヨノ大統領はじめ各閣僚が着用され、両国の技術の融合と絶賛を受けた。2011年東日本大震災に際し、ジョグジャカルタでは復興支援事業が開催され、1億6,522万700ルピアの義援金が集まった。和装業界からは継続的な植樹支援を受け王室や植樹地への訪問交流が進んでいる。

技術移転と事業化の推進

2018年日本インドネシア友好60周年事業として西陣織の7社「西陣織アンソロジー」がインドネシアでの事業展開を見据えバティック



西陣織の技術をジョコ・ウィドド大統領に紹介する「西陣織アンソロジー」とみや織物富家氏、中央：石井正文駐インドネシア大使

り技術移転」を実施。さらに工業省の奨励を受け染色性と接触冷感の優れた日本の繊維素材“ベンベルグ”を活用したバティック等の伝統手工芸製作が進んでいる。

両都市友好35周年を迎える2020年、相互の伝統工芸の連携が新たな持続的な事業連携へと花開くことが期待されている。

プロフィール

黒田 正人（くろだ まさと）
地域の伝統技術と“未活用資源”“農林副産物”の活用による投資の少ない地場産品開発支援を JICA、APO、CLAIR、UNESCO 等のコンサルタント事業として 20カ国で実施。自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザー。